



ように「定義」している。「健康とは、完全に、身体、精神、及び社会的によい状態であることを意味し、単に病気でないとか、虚弱でないということではない。」

すなわち、健康とは病気や虚弱でないというだけではなく、身体的には体力値が高く、知的には適切な教育を受け、家族・地域・学園・職場といった社会的状況の中にあって豊かな人間関係があり、精神的にも安定している状態であることといえるだろう。そのような健康観を土台に、「健康に生きていることは私たちの基本的な権利」としてとらえた保健学習が教室で行えることを思い描きながら教科書をみていきたい。

#### (1) 学習指導要領で「保健」学習の内容はどうか変わったか

変化のないことを“特徴”と表現することは適切ではないが、今回の指導要領改訂の特徴は「大きな変更はない」と言えるのではないか。その中でも、社会状況を反映して犯罪被害防止の観点での内容や、人権や生命尊重、福祉・共生・共存など今日的課題へ対応した内容が加わったことが改善された点である。

現行指導要領に述べられている「心と体を一体として」というとらえ方も引き続き目標に掲げられていることへの警戒は押さえておきたい。「保健体育」の中にとさら「心」の問題が取り上げられることに一つの危惧も感じる。体育が「教練」と呼ばれ、「お国のために犠牲になれ」る精神を、体を鍛えることと一体のものとして育てられた「苦い経験を戦前の教育の中で持っていることから、「国」が心の問題に入り込んでくることの危うさを忘れずにいたい。

その上で今回の指導要領で示されている「保健」学習の目標と内容を列記(抜粋)して、改定点を確かめたい。

#### 《3・4年生》

①健康の大切さを認識するとともに、健康によい生活について理解できるようにする。

## 1. 教科書検討に向けて

薬局やコンビニエンスストアの店先にはたくさんさんのサプリメントが並んでいる。街中の薬局も急激に店舗数が増えてきている。「健康」をテーマに取り上げたテレビ番組も多くなってきている。この間、国民一人ひとりの「健康」への関心が高まってきていることは、文化的な生活をおくる上で好傾向であるといえる。しかし反面、その健康への意識変化は、私たちの身の回りに氾濫する健康関連の話題や情報によるものも少なくない。人々の関心とともに、健康に対しての正しい知識やとらえ方を養っていくことが求められている時代であるともいえるのではないか。大人たちの問題だけではなく、今日の子どもたちの健康をめぐっては、生活習慣の乱れや食生活の乱れが要因と思われる肥満や生活習慣病の誘発、体力の低下や成人病の低年齢化、薬物使用のよる被害などの問題が指摘されている。改めて、国民の健康について考える線上に「保健」学習があることとらえたい。

健康問題を掌る世界保健機関 (WHO) としては、健康について次の

…内容として「食事、運動、休養および睡眠の調和のとれた生活」「体の清潔を保つことや明るさ、換気などの生活環境を整えること」を示している。

「健康の状態は、主体の要因や周囲の環境の要因がかわっていること」を理解できるようにすることが新しく加わった。

②体の発育・発達について理解できるようにすること。

…内容として「体は年齢に伴って変化すること」「体の発育・発達と調和のとれた食事、適切な運動、休養および睡眠が必要であること」「思春期の体と心の変化」を示している。「体の発育・発達には個人差があること」を新たに強調している。

## 《5・6年生》

①心の発達及び不安、悩みへの対処について理解できるようにする。

…内容として「心は年齢とともに発達すること」「心と体は相互に影響し合うこと」「不安や悩みへの対処は、大人や友だちに相談するなど、いろいろな方法があること」に加えて、対処には「仲間と遊ぶ、運動する」などコミュニケーションとリフレッシュを取り入れている。

②けがの防止について理解するとともに、けがなどの簡単な手当てができるようにする。

…内容として「けが防止のための安全な行動」「けが防止のための環境整備」「けがの簡単な手当て」などに加えて、「犯罪被害の防止」を扱うことが解説されている。

③病気の予防について理解できるようにする。

…内容として「病気は、病原体、体の抵抗力、生活行動・環境がかかわり合って起こること」「病気の要因ごとの病気の予防」「喫煙・飲酒・薬物防止」に加えて、「地域での保健にかかわる活動」を特記した。

②「保健」学習を支える教科書になっているか

私たちは、これまでの「保健」学習の実践から保健を学ぶ目的を次の

ような学力を一人ひとりの子どもたちに育てたいとしてきた。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>①人のからだや生理のしくみと保健生活についての科学的な認識の基礎を身につけること</li><li>②平和国家を担う主権者として、民主的にして理性的な人権意識の高い健康認識を育てること</li><li>③自分と人々の健康を権利として生活の中で築いていける判断力と行動力を育てること</li></ul> |
|---|

上記三点を保健学習の重要な柱として押さえ、学級の子どものための「今」を見つめることから「何を」こそ教えたいのかを考え、そのための教科書として見てみよう。子どもたちのからだと健康の現実をふまえ、その子どもたちに教師として抱く「願い」を実現させるために少しでも役立つ教科書を手にとりたいものだ。

そのため私たちは、一般的に教科書検討の観点とされている「内容の配列・分量」「表記や表現方法」「資料の精度」「学習効果を高める創意工夫」「人権への配慮」「色合い・印刷・紙質・製本」などの検討観点だけでなく、次の視点から教科書の内容を検討してきた。

## 《教科書を見る「視点」》

①健康についての「科学的な根拠」が示されているか。

日常の場面で、健康な生活や行動の根拠が科学的な知識と認識をもとに理解できるように課題設定がされているか検討してみよう。「知識として」知っているのに行動できないのはおかしい。」だからそれは、しつけ強化だと個人努力を導く。この「認識と行動を分離」させて考える保健学習を導いていないか、教科書の展開に注意してみよう。

②「健康の自己責任型」になっていないか。

国は本格的な高齢社会をむかえて、年金・介護などの福祉要求の抑制、増大する総医療費の削減をますます強めてきている。増えている成人病

対策などに自助努力思想の浸透が急務であると考えている。その意識づくりに「保健」教科書が使われはしないかみてみよう。

③心の学習を強調することが「道徳教育の受け皿」になっていないか。

心の学習は「心は脳に存在し、“生活経験を通し、加齢とともに発達する”ことを理解させることが大切であるのに、「きまりを守る」「思いやりを大事にする」「なかよくしましょう」的な精神主義的健康として、「道徳教育」の強化につながっていく心配はないか吟味していこう。

④健康教育課題が他教科との連携で考えられているか。

「保健」学習は他教科とも連携してすすめる必要がある教科でもある。理科での「身体の学習」、家庭科での「健康な生活」、社会科での「環境学習としての水・空気・日光」などとの関連を考えながら、『組織された認識を順次学習する』ことが大切にされる保健学習になるために「自主編成の課題」も意識しながら教科書を見てみよう。

## 2. 各社「保健」教科書の特徴点

### 3・4年生

D社、G社、K社、T社の4社の「保健」教科書について、その主な特徴点をまとめてみる。

(1)「毎日の生活と健康」領域を見てみよう。

この領域でははじめに、D社、G社、K社、T社とも、健康とはどのようなことなのかという定義付けをしているが、各社のその取り上げ方に違いがある。D社は朝昼夜の生活場面の絵から健康に過ごすための心がけを、K社は生活のいろいろな場面の絵から健康とはどんな時かを考えさせている。またT社とG社は、自分の生活をふり返らせるチェックシートを入れ、そこから健康とはどんな状態なのか、健康には何が関係しているのかを考えている。特にG社のチェックシートは、自分の体の

調子だけでなく、心の状態も振り返らせるようにしている点が特徴的である。

次に「健康によい1日の生活」ということで、T社とK社は、1日を元気に過ごさせているか振り返らせている。さらにK社は自分の前日の生活時間表を書かせ、生活リズムをつくらせることができているかについても考えさせるようにしている。G社とD社は、1日の生活のチェックシートをつけることで、D社は「リズムのある生活」ができているか、G社は「規則正しい生活」ができているか振り返らせている。さらにG社は、1週間めあてを立てて過ごしてみても、実行後の反省を記入させるようにもしている。

「身の回りや体のせいけつ」では、G社が頭皮の拡大写真と皮膚の拡大図を、K社はワソガ調ではあるが皮膚の拡大図のみを載せて、汚れが皮膚にどのように付着しているかを示している。T社は単元の最後に発展として汚れた皮膚の拡大図を載せている。そして、各社とも寒天培養による手の汚れ具合を視覚からわかるようにさせていて、石鹸で手をよく洗うことを促している。またK社とD社は、使用したハンカチに付着した汚れの拡大写真を載せ、手を洗った後にきれいなハンカチを使用することも強調している。さらには、G社、K社、D社は、着用した靴下や下着の汚れを薬によって表出させた写真を載せて（T社は最後の発展で載せている）洗濯の必要性を示し、D社とG社は、体のどこが汚れやすいか、汚れを体の絵に描き込むことで気づかせるようにもしている。一方K社、T社は、自己点検により自分で清潔さに気をつけているかどうかの振り返りをさせている。

「身の回りのかんきょう」では、各社とも児童の話し合いによる気づきから、部屋の明るさの調節や換気の必要性を記しているが、T社は、模型の室内に線香の煙を充滿させ、窓を開けることでその煙が外に出ていくという実験の様子を載せている。またK社はダニやカビの顕微鏡写真を載せて、暖房によってダニやカビが増えることを視覚からもわかるような工夫をしている。

「健康を守る活動」では、各社とも保健室の先生や栄養の先生、学校医の先生を取り上げ、それぞれの活動を紹介しているが、T社は発展として「早寝早起朝ご飯」ができていのかを1週間調べるシートを載せ、K社は教科書の最後に読み物として載せている。G社とD社は、健康に過ごすために自分で気をつけることは何かを記入する欄を設けている。

## (2) 「育ちゆく体とわたし」領域を見てみよう。

『体の発育』では、各社とも取り上げた写真・図版に違いはあるものの、学習内容は全くといっていいほど同じである。特に共通して、発育の個人差、男女差を強調している。D社とT社は、自分の身長伸びを視覚で捉えやすくするためのワークシートを入れているが、学習課題の意識化という面では効果的である。G社は単元の最後に発展として、入学してから卒業までの身長の伸びをグラフ化するページを入れている。特にT社は表も掲載して、算数の小数のたし算、ひき算につなげて学習するように促している。G社が“学校医の話”、K社が“養護教諭の話”、T社はコメントという形で、過剰なダイエットへの忠告を載せていることも一つの特徴である。

『思春期の体の変化』、つまり第二次性徴の学習は、この領域の重要な柱となるものである。ある面では子どもたちが最も関心を持つところでもあり、科学的認識を育てることがより重要になってくる。そこで、その第二次性徴の取り上げ方について着目してみた。

「初経（月経）」「精通（射精）」については、各社とも図版を入れて、ていねいに扱っているが、月経血や精液がどこを通過って体外に排出されるのか矢印で記述しているのはG社とD社で、精子と卵子の顕微鏡写真を載せているのはG社、K社である。さらに「月経のしくみ」を図版を入れてくわしく示しているのはD社とK社で、T社は発展で扱っている。また、G社とD社は、はじめて月経や射精を経験した子の作文や保健の先生の体験談を載せ、不安を取り除こうとする配慮がうかがえる。各社とも個人差があることにはふれていて、初経や精通を経験した人数を、

学年ごとのグラフで示している。一方G社とK社は発展として、初経や精通がおとなの体になる準備であることにふれ、精子と卵子によって新しい命が生まれるという内容で母親の胎内の図を載せている。D社も同じ胎内の図を載せているが、胎児とへそのおについての関係や胎児の成長についての説明でまとめている。

思春期の体の変化については、ホルモンの働きとの関連を落とすわけにはいかない。それを記述しているのはG社とK社とT社の3社で、脳からの命令によりホルモンが出て、体の変化が起こることにふれている。また体つきの変化については、実際の人の水着写真や裸図を入れているのはT社とK社で、D社とG社は着衣の人物図を入れて説明していて、取り扱い方に違いが見られる。

『心の変化』では、各社とも異性への関心が高まることを中心に記述している。そこで使われている図版に大きな差異はないが、K社は、体や心の変化の不安を綴った中3生徒が高学年の時期を振り返った作文、D社は異性が気になり始めた児童の作文を載せている。また変化の表れ方は一人ひとり違いがあることにD社とT社はふれ、Kは異性と協力していくことの大切さを強調している。

『よりよく育つための生活』で、発育には食事、運動、休養・睡眠が大切であることを各社とも扱っている。特にT社は、背骨の断面の写真を載せ、運動や食事によって骨密度の違いが出ることを強調し、発展として睡眠の重要性について解説している。G社は運動や休養・睡眠についてチェックリストを載せ、D社は実際の朝食や給食の献立を記入する欄を載せることで、健康によい生活ができていのかの振り返りをさせている。一方K社は、前日の睡眠時間を記録させることで、十分な休養や睡眠がとれているか振り返らせている。

5・6年生

指導要領での配列替えに伴って、「心の健康」と「けがの防止」の単

元が入れ替わったが、「心の健康」が最初の学習内容になることと体育の目標の中の「心と体を一体としてとらえる」ことについて、道徳的な学習に偏らないよう意識していくことが必要と思われる。

#### (1) 「心の健康」領域について

教科書の最初の単元でもあり、各社それぞれ編集上の工夫をしている。

D社は①心の発達、②心とからだの関係、③不安やなやみ ④不安やなやみへの対処、の4つの小単元に分けて構成。教科書の構成としてはサゾノート化して、日常で起きそうな様々な「心のありよう」の場面に ついて図示とともに列記し、チェックシートの活用できるように工夫されている。「心とからだの関係」では、生活に経験から「心の状態」と「体調」との関係を記述している。

G社は①心の発達、②心と体のつながり、③不安やなやみをかかえたとき、の3つの小単元で構成している。2ページにわたる「思春期の心、人とのつきあい」という項目にて、「自分のよいところを発見しよう」とした活動や、自分を知るために「友だちの力を借りる」という対人関係を進めている。記述活動のスペースが多く取られG社の特徴と工夫の一つである。

「心と体のつながり」では、「心が体に影響したり、体が心に影響したり」するのは、心の働きが脳で行われていることを明記し、「心と脳」の関係を的確に取り扱っている。「脳の働き」と「神経によるつながり」を関係図で示し、子どもたちに生理学的な観点から理解させようとしている点は学習を深めさせてくれる。「思春期はだれでもなやむもの」とコラムを編集し、思春期の人格形成とかわりにふれている点も評価される。

T社は①心の発達、①心の発達②心とからだのつながり、③不安・なやみがあるときの3つで構成している。「心の発達」を「感情」「社会性」「思考力」に分けて、加齢とともに変化してくる生活場면을提示して「発達」を考えさせようとしている。

「心とからだのつながり」では、「感情の変化」と「からだの変化」という観点から日常の様々な場面を示したりや事例をグラフ化したりして、自分の経験・体験を想起させることで考えさせようとしている。生理科学的な解明にやや足りないように思われる。「みんなで生きる」という小単元構成は他社には見られない編集で、「心の発達」を他者との関係性で考えさせようとしている点は評価できる。T社の構成として、各単元の後に「ひろげよう」の項目で具体的な事例を挙げ、相談窓口等の提示をしており、現実的な行動の示唆となっている。単元ごとに学習のふりかえりのチェックシートがあることも特徴的である。

K社は、①心の発達、②心と体のかかわり、③なやみや不安、の3つで構成している。「心の発達」の導入場面では、「広がる人とかかわり」と題して、自分の周りのさまざまな人たちの生活の中で体験するであろう場面を数多く図示している。人とかかわりで「心の発達」を考えさせようとしている意図が明確に表わされている。

「心と体はつながっている」の項目では、人体の図によって、脳と体の神経による伝達の様子をえがいており、イメージしやすいものになっている。「すきになれる自分」という項目をおこしている点も特徴的である。

#### (2) 「けがの防止」領域について

この領域では「人の体とけが」についての学習と、「けがの防止」についての学習が必要と思われるが、「けが」そのものの学習は扱われず、「けがの防止」に多くのページをさいている。「自然治癒力」などについての記述があってもいいのではないだろうか。各社とも扱い方の軽重はあるにしろ「けがの手当て」として、その処置についてふれているのは「保健」学習としての内容がある。

児童が遭遇しやすい熱中症についての記述があるのはT社G社D社。K社は犯罪被害防止に4ページを使っており、徹底しているもの、「自己責任論」が読み取れる感もある。

G社は「けがが起ころのはなぜ」と問いかげ、これまでの日常生活の中から「ひやり」とした経験を出しあうことから学習を始めている。導入として無理なく学習に入っているものと思われる。また、けがや事故の発生を「人の行動」「環境」の関係でとらえ、「心の状態」や「体の調子」と結びつけていることを示唆している点はよい。

G社、T社、D社、ともに「簡単なけがの手当」をていねいに図で示して編集している点は、本来の「保健学習」の内容でもあり大事にしていきたい。手当ての方法にも細かな注意書きがあり配慮されている。

導入部分で、T社、D社、K社は学校の教室や家庭で過ごすたくさん子どもたちを俯瞰した絵を見開きで掲載し、「けがをしそうな子を探してみよう」「危険だと思うところに○をつけてみよう」と、自分と学校の日常場面から課題を見つけさせていこうとしている点は工夫されている。

G社はメモという形ではあるが、「体に備わっているきずを治そうとする働きによって治る…」と、自然治癒力にふれている点が評価される。G社は「メモ」という形式をとって、指導要領にはない大事な事柄を掲載して活用度が高い。

各社とも依然、交通ルールや交通標識を提示しての交通安全教育的な内容が多く、「保健」の学習内容としてことさらに上げる必要があるのかどうか実践的に検討していく必要がある。

### (3) 「病気の予防」領域について

この領域では「病気の起こり方」についてふれてから、「病原体が主たる要因で起こる病気」「生活の仕方にかかわって起こる病気」「環境にかかわって起こる病気」「からだの抵抗力が弱まって起こる病気」の4つに分類し、その予防について説明するという基本的な構成に各社とも差異はない。

そこで、「エイズ」と「薬物・タバコ・飲酒の害」に着目してみる。まず、「エイズ」については、全体として取り上げ方が弱くなったよ

うに思われる。

G社、K社は半ページ以下の取り上げ方。感染のしかたについては他社よりは多少科学的な記述になっている。

T社は1ページ近く使い「エイズという病気の説明」を解説し、H1V感染者の世界総数をグラフに表すことで、増加を実感させるものになっている。

D社も1ページ近く使い、患者支援のシンボルである「レッドリボン」や「エイズ理解のための活動」も紹介してはいるが、内容はもっぱら感染力が弱いという点に終始している。

各社とも、教科書の改訂毎にエイズに関する客観的資料を割愛したものは残念である。

「薬物・たばこ・飲酒の害」の取り扱いは各社とも、ていねいになっている。「薬物・たばこ・飲酒の害」による青少年の健康破壊が一層進んできている社会的背景とも関連しているものと思われる。

各社とも「飲酒の害」「喫煙の害」「薬物乱用の害」の3害について、それぞれ見開きの2ページを使って、ていねいに扱っている。それぞれ健康な人と害に侵された人の「よごれた肺の写真」「縮んだ脳の断面写真」「いたんだ肝臓の標本写真」「ぼろぼろになった歯」などの写真を掲載し、写真のリアルさからその恐ろしさをわからせようとしている。視覚的にも人間破壊の状況を伝えようとしている。

G社とK社は「発展学習」でタバコの有害物質を説明しているのはよい。

D社も、「悪い誘いをことわるロールプレー」や、社会的な啓発運動やキャンペーンも取り上げて、学習の幅を広げている。「生活習慣病」の単元で、D社だけは、「生活のしかたによって起こる病気」という呼び方で一貫しているのは、生活習慣が原因でない『成人病』患者への人権的配慮からか。注目される。

各社とも巻末に、新しく入った「地域での保健活動」についての項目を入れたが、内容にその大きなちがいは見られない。

T社はさらにその発展として、社会問題となっている感染症や肥満とやせすぎの問題や受動喫煙等の話題にもふれている。

D社の発展では「大切な命」として、「死ぬ」ということに触れ、災害での救助により助かった子どもの事例と病気でなくなつた子どもの事例を挙げ、読み応えのあるものになっているものの道徳との決定的ちがいを打ち出すことはできなかった。

表紙裏の目次横・前置きに各社の意図するところが想像できる。

G社は、前回同様車いすスポーツの写真を載せ、健康の意味を広く捉えようとさせる意図も読み取れる。だれもが健康に生きる権利を持っていることも文面化している。

K社は、外国の人たちにも目を向け、誰もが健康に毎日を過ごせる社会をつくろうと呼びかけている。

T社は短い前置きがあり、D社には前置きはない。

### 3. おわりに

学習指導要領と教科書検定という枠の中で、各社とも独自色を出すために知恵を絞っての教科書づくりにとりくんではいるのだろう。しかし、各社とも同じようなページ数にその内容を漏れなく掲載することが要求される中、その独自色を出すことはなかなかむずかしいことである。どの社も「同じようなもの」になってしまったといえるが、ビジュアルな紙面構成がすみ、写真・イラストも多用して、教科書としての質を上げようとしている努力している点を認めつつ、子どもの目線からみでの活用度を

これまでの教室実践とこれからの教室実践を通して今後も検討を続けていくことが大切である。

「自ら課題を持ち、学び、判断する…」ための設問形式と書き込み方式を取り入れ、教科書のサゾノート化を図り「主体的な学習」を担保しようとしていることはこれまで通りである。加えて、各社とも「思考力・

判断力を育成する」学習を主張していることは、他教科を含め今回の教科書づくりの編集方針上の特徴でもある。

新学力観に基づき、選別教育をカモフラージュするための「自ら課題を持ち、学び、判断する」ではなく、ホンモノの「主体的な学習」をすすめていくために、学習内容の吟味をさらにすすめ、私たちがまた『自主編成』をすすめていくことが求められている。

引用・参考資料：「小学校教科書検討資料」  
(都教組小学校教科書検討委員会編)